

佐賀県立博物館報 №.28

佐賀市内1丁目15番23号 TEL 0952(4)3947



阿彌陀如来坐像 (像高36cm 鎌倉時代)

この像は蓮花座上に結跏趺坐し定印を結ぶ像高36cmの阿彌陀如来坐像で、ヒノキ材の一本造りである。

頭・体・膝前から台座の蓮肉にいたるまで殆ど一材から木取りしているが、背後に背板をあてている。内刻りはほどこされていらない。

地髪部や肉髻は低く、そこに毛筋彫した頭髪には荒さが残るが、一面力強くも感じられる。

彫眼の目はそれほど見開きは強くはないが切れ長である。両頬から頸にかけては肉付きに量感はあるが、しかし、面長で引き締った強さは感じられない。

また、胸をひろげた納衣の間にあらわれる胸の厚みは、腕の豊かな肉付きとともに印象的である。左肩から腹前にかけて彫出された衣文は、蓮台に垂下する垂裳とともに太目でたくましく荒々しく、技術的に稚拙である。

しかし、稚拙ながらもノミ跡には写実的な表現に精一杯の努力を傾けて鎌倉仏の作風をのぞかせており、地方仏師の素朴な作例として貴重である。

また翳ぎ付けた背板に面する背部には国家の繁栄と施主の幸福を祈願した墨書銘があるが、末尾に鎌倉時代末期「文保」の年号が記されていてこの仏像の価値を更に高めている。なおこの像が安置されている三学寺は佐賀郡久保田町徳万にあり、承和5年(838)僧仁海が創建し、以後元和年間頃龍造寺家が再興したと伝えられる天台宗の古寺である。

目次

木造阿彌陀如来坐像	1
「肥前の仏教美術展」から	2
「肥前の仏教美術展」出品目録	3~6
大陸文化と肥前の仏教文化の交流について	7
肥前の石仏について	8
肥前の高僧をめぐる	9
博物館日誌・行事のお知らせ	10

「肥前の仏教美術展」から



10月10日から当館で開催された「肥前の仏教美術展」は11月9日盛会裡に終了した。この企画展は考古・工芸・高僧・絵画・彫刻・石造の6部門で肥前の仏教美術をほぼ全領域にわたって概括し紹介したものである。

本県では、文化不毛の地としばしば評されることがある。水は低きに流れ文化は高きにつくとすれば、この展覧を通じて見る肥前の仏教文化の流れは、新しい驚きでずらあるように思われる。

肥前は古くは平安時代から中央と密接な関係があり、大陸とは地理的にみても文化摂取の接点であった。仏像彫刻では平安朝の作風にも地方色豊かなものがあり、中世仏画では高麗、李朝の優品が多く存在している。また石造物や金工面にみられる独自の様式美は肥前の仏教美術の特色ともいえる。一方日本の仏教史に大きな力となった高僧の存在も特筆されよう。

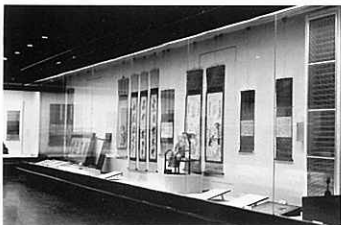
考古部門

肥前の6古寺の出土瓦の中、単弁八葉蓮華文、複弁八葉蓮華文の軒丸瓦及び三垂瓦文、屈行唐草文の軒平瓦を出土する寺浦庵寺（暗気庵寺）は特に注目される。

県内経塚30余カ所の中、今回は12カ所（うち在銘4カ所）を展覧した。経筒にみられるすぐれた金工技術と滑石製の堅牢な外筒には平安時代の厚き信心と執念のほどがうかがわれる。

高僧部門

新義真言宗の開祖鑑鏡上人をはじめ臨濟宗の種子栄尊、円爾弁円、藏山順空、固山一掌、是琢明琳、閑室元信、曹洞宗の湛然暖重、日蓮宗の日親、黄檗宗の潮音道海、化導道庵、大潮元晴などの肖像、遺墨を時代にそって展覧した。鑑鏡、弁円、順空の肖像画は新旧両様式を特徴づける鎌倉、南北朝様式の随一のものである。また一掌にみられる中世の典型的書風、日親の「十方微塵抄」は琢の「朝鮮從軍日記」は文献記録として、また元信の遺偽、潮音の「祖ヲ薦ス」の遺墨は両人の人間性を顕わすものとして貴重であり、三岳寺の聯額、福額は即非、木庵



の黄檗書風とともにその保存のよさが注目される。

工芸部門

懸仏、梵鐘、鐃口等は肥前の金工技術とその変遷を知る好例の資料である。現存する在銘古鐘は太平6年銘朝鮮鐘、建久7年銘和鐘、永和2年銘肥前鐘の3口であるが、江戸期の谷口、植木系の半鐘はこれ等の古鐘の折衷様式として注目され、「肥前鐃口」とともに「肥前新鐘」として今後の研究の緒をつくっている。

絵画・彫刻部門

広福護国禪寺の仏画4点、鏡神社の楊柳観音図像は補修後の初公開で、高麗、李朝の優品として異彩を放っていた。なかでも華麗で大幅の楊柳観音図像、巧緻をきわめた阿弥陀八代菩薩図像、紺紙金字の法華経写経見返し図、図像として類例のない善財童子歴参図など諸来の仏画は本展の特筆すべき逸品である。

仏像では、国、県指定の殆どが出品された。これらが一堂に出揃ったのは今回が初めてである。古来から今日まで信仰の力で伝世された仏像で、その仏体のかもしだす荘厳な雰囲気が会場にあふれていた。今度の調査で判明した華嚴寺の如来形立像、殿原寺の准胝観音像、三学寺の阿弥陀如来坐像、医王寺の秘仏薬師如来立像、鷹島の銅造釈迦如来坐像は初公開で今後の研究の課題である。

石造物部門

江戸時代の民間信仰の対称である石像物の逸品が揃った。元禄から正徳期の肥前の石像は本影をしのぐときえいわれている。端正なえびす坐像、莊重な役ノ行者坐像、美麗な如意輪観音坐像など石材を極度にまで生かした肥前石工の優れた技量をいかんなく発揮している。なお在銘の線刻地藏尊像、線浮彫地藏像は、肥前の初現の彫像として極めて貴重な資料である。

最後に展覧会にご協力いただいた皆さまに衷心よりお礼を申し上げます。

「肥前の仏教美術展」出品目録

番号	指定	品名	規格	数量	時代	出品者	備考(銘)
○古瓦							
1		塔ノ塚廃寺 単弁八葉蓮華文軒丸瓦	径35.2mm4.7mm	2	奈良	祐徳博物館	
2		大願寺 単弁八葉蓮華文軒丸瓦	径 20.2	2	"	健福寺(大和町)	
3		寺浦廃寺 単弁八葉蓮華文軒丸瓦	" 19.5	1	"	佐賀県教育委員会	
		" 三重弧文軒平瓦	" 40.0	1	"	"	
		" 複弁八葉蓮華文軒丸瓦	" 18.2	1	"	"	
		" 偏行唐草文軒丸瓦	" 31.2	1	"	小城高校	
4		肥前国分寺 複弁八葉蓮華文軒丸瓦	" 17.2	2	"	佐賀県教育委員会	
		" 均整唐草文軒平瓦	" 24.0	1	"	"	
		" 鬼瓦	"	1	"	大和町教育委員会	
5		辛上廃寺 均整唐草文軒平瓦	" 17.5	1	"	七田忠志(神埼町)	
		" 複弁軒丸瓦	" 19.5	1	奈良末~平安	"	
6		東妙寺 東妙寺銘軒丸瓦	内区径13.0	1	鎌倉	祐徳博物館	
○経筒							
1	県重文	仏法堤経塚出土品 銅製経筒	高 30.0	1	平安	大町郷土研究会	嘉保三年(1096)
		" 滑石製外筒	" 37.5	1	"	"	
2	県重文	山崎経塚出土品 銅製経筒	" 26.8	1	"	佐賀県立博物館	天治元年(1124)
		" 陶製外筒	" 29.0	1	"	"	
		" ガラス玉	"	85	"	"	
		" 炭化物	"	1	"	"	
3	県重文	セセリ谷経塚出土品 銅板製経筒	" 25.5	1	"	"	
		" 滑石製外筒	" 37.5	1	"	"	
		" 経文	24.8×34.5	1	"	"	天永三年(1112)
4		春振山経塚出土品 銅製経筒 (1号~4号まで)	"	4	"	"	康治元年(1142)
		" 鏡	"	4	"	"	
5		牛ノ谷経塚出土品 銅製経筒	高 30.3	1	"	祐徳博物館	
		" 白磁盒子	"	1	"	"	
6		片山1号経塚出土品 銅板製経筒	" 24.2	1	"	"	
		" 陶製外筒	" 28.8	1	"	"	
7		片山2号経塚出土品 滑石製経筒	" 39.3	1	"	"	
8		鏡神社甲経塚出土品 四段横上式銅製経筒	" 39.4	1	"	鏡神社(唐津市)	
		" 陶製外筒	" 41.8	1	"	" (")	
9		鏡神社乙経塚出土品 陶製経筒	" 28.0	1	"	" (")	
		" 胡州鏡	径 11.0	3	"	" (")	
		" 盒子	高 4.5	2	"	" (")	
10		千々賀経塚出土品 銅板製経筒	" 25.0	1	"	正円寺(唐津市)	
		" 滑石製外筒	" 33.0	1	"	" (")	
		" 和鏡	径 10.7	1	"	" (")	
11		座主経塚出土品 銅製経筒	高 31.2	1	"	志田原一馬 (浜玉町)	
		" 陶製外筒	" 31.3	1	"	"	
		" 鉄刀	長19幅1.6	1	"	"	
12		崇判山経塚出土品 銅製経筒	高27.1	1	"	真鍋政治郎 (北方町)	
○高僧							
1		木像 覚鑿上人坐像	高 66.0	1軀	室町	常在寺(塩田町)	応永31年(1424)
2		絹本着色 覚鑿上人像	110.6×78.2	1幅	鎌倉	長谷寺(奈良県)	
3		木造 神子禪師坐像	高 113.0	1軀	"	朝日寺(福岡県)	嘉元2年(1304)
4		絹本着色 神子禪師像	104.0×57.2	1幅	江戸	万寿寺(大和町)	永正9年(1513)摩補

番号	指 定	品 名	規 格	数 量	時 代	出 品 者	備考(銘)
5	重 文	開山行業記 明琳は球筆	30.5×39.3	1 卷	桃 山	万寿寺(大和町)	慶長7年(1602)写
6		絹本着色 聖一國師像	165.0×98.0	1 幅	鎌 倉	東福寺(京都府)	弘安2年(1279)賛
7		聖一國師坐跡 常楽庵規式	34.8×53.8	1 冊	" (")	" (")	弘安3年(1280)
8		聖一國師 銀欄御袈裟	107.0×215.0 ×253.0	1 領	"	広福護国禪寺 (武雄市)	
9	重 文	木像 円鑑禪師坐像	高 85.0	1 軀	"	高城寺(大和町)	正安2年(1300)願文
10	"	絹本着色 円鑑禪師像 明兆筆	80.2×40.5	1 幅	南北朝	永明院(京都府)	
11		円鑑禪師墨跡	28.5×41.5	1 冊	鎌 倉	" (")	徳治2年(1307)
12		絹本着色 円鑑禪師賛 普賢菩薩像	74.0×37.0	1 冊	"	" (")	徳治2年(1307)賛
13	重 文	固山一堂墨跡 清源寺家訓	29.2×177.6	1 巻	南北朝	光明院(京都府)	観応3年(1352)
14		固山一堂墨跡	31.8×123.5	1 幅	"	永明院(")	延文元年(1356)
15		木造 日親上人坐像	高 29.5	1 軀	室 町	法蓮寺(唐津市)	文明16年(1484) 日低作
16		日親遺告 十方微塵抄	26.6×36.7	1 幅	"	光勝寺(小城市)	永享12年(1440)
17		紙本着色 日親筆 十界勧請大曼荼羅	116.3×56.2	1 冊	"	" (")	永享12年(1440)
18		明琳は球筆 朝鮮役従軍日記	17.5×240.0	1 巻	桃 山	泰長院(佐賀市)	文禄2年(1593)
19		は球筆使用回		1 冊	"	万寿寺(大和町)	慶長11年(1606)
20		は球筆 回向本		1 冊	"	" (")	"
21		絹本着色 閑室元信自賛像	135.5×54.2	1 幅	江 戸	三岳寺(小城市)	慶長17年(1612)賛
22		和綴木版摺 唐太宗李衛公問對	27.0×19.4	1 冊	"	北島治慶(多久市)	寛永11年(1636)書 寛文4年(1664)版
23		閑室元信墨蹟 (1)	33.0×49.0	1 面	"	佐賀県立図書館	3月23日
		" (2)	33.0×49.0	1 冊	"	"	7月5日
		" (3)	34.0×52.0	1 冊	"	"	12月3日
24		絹本着色 潮音道海自賛像	106.0×46.5	1 幅	"	真照寺(小城市)	元和元年(1681) 喜多元規筆
25		潮音墨蹟	133.0×28.0	3 冊	"	緑樹院潮音舎 (京都府)	黒瀧潤書
26		" 「蔭祖母慈山禪尼」	24.2×50.7	1 冊	"	" (京都府)	"
27		木造 湛然梁重坐像	高 59.0	1 軀	"	通天寺(大和町)	天祐月枝作
28		紙本着色 湛然和尚開眼十王絵図	115.5×49.0	2 幅	"	高伝寺(佐賀市)	寛文7年(1667)奉納
29		化縁道竜墨蹟	23.6×35.0	1 冊	"	富岡フミ(佐賀市)	甘露化縁
30		大潮元時墨蹟	27.2×45.5	1 面	"	内山寺(伊万里市)	甘露大潮
31		"	29.1×34.5	1 幅	江 戸	富岡フミ(佐賀市)	甘露八十三翁
32		扁額 木庵筆 瑞光殿		1 面	"	三岳寺(小城市)	延宝甲寅(1674)書
		" 即非筆 医王山	85.0×193.0	1 冊	"	" (")	元禄12(1699)書
33		聯額 即非筆 洞明……		1 冊	"	" (")	元禄15(1702)書
		" 東刹……		1 冊	"	" (")	"
○ 工 芸							
1	県重文	水上懸仏	径 37.0	1 面	鎌 倉	大和町水上部落	文永8年(1271)
2	長崎県 重 文	筒瀬免懸仏	" 25.0	1 冊	"	松瀬隆美(長崎県)	正徳4年(1291)
3		高野免懸仏	" 34.3	1 冊	室 町	宮本一男(")	天文4年(1535)
4		潮見神社懸仏	" 24.5	1 冊	江 戸	潮見神社(武雄市)	元禄5年(1692)
5	重 文	大平六年銘銅鐘 (朝鮮鐘)	高73.0径51.4	1 口	高 麗	恵日寺(唐津市)	太平6年(1026)
6	"	建久七年銘銅鐘 (和鐘)	" 84.0径47.0	1 冊	鎌 倉	健福寺(大和町)	建久7年(1196)
7	県重文	永和二年銘銅鐘 (肥前鐘)	" 83.0径49.5	1 冊	南北朝	医王寺(相知町)	永和2年(1376)
8		肥前新鐘谷口系 (半鐘)	" 39.9径32.8	1 冊	江 戸	永寿寺(相知町)	元禄5年(1689)
9		" " (")	" 66.0径39.5	1 冊	"	円蔵院(佐賀市)	明和9年(1772)
10		" " (")	" 54.2径33.8	1 冊	"	修学院(東春振村)	享和元年(1801)
11		" 植木系 (")	" 77.0径45.5	1 冊	"	福満寺(佐賀市)	寛文5年(1665)
12		肥前古鐘銘張合せ屏風		六曲 一隻	"	鍋島報効会 (佐賀市)	
13	長崎県 重 文	鰐口	径 30.0	1 口	南北朝	善福寺(長崎県)	天平10年(1335)
14		"	" 18.4	1 冊	室 町	東楽寺(有明町)	庚正3年(1457)

番号	指 定	品 名	規 格	数 量	時 代	出 品 者	備 考 (銘)
15		肥前鐙口	径 23.7	1 口	江 戸	宝光院(諸富町)	延宝3年(1675)
16		"	" 52.0	1 "	"	妙海寺(多久市)	元禄15年(1702)
17	県重文	戒体箱	15.5×37.0 ×16.0	1 合	室 町	実相院(大和町)	天文元年(1532)
18	"	居箱	29.0×36.0 ×12.5	2 "	"	" (")	" "
19		如意	全长51.5 雲彩17.3×25.0	1 柄	"	" (")	
20		四天王五結鈴	高22.8径 6.5	1 箇	唐	誕生院(鹿島市)	
21		銅鐸鈴	" 27.0×13.6	1 "	室 町	円通寺(小城市)	享徳2年(1453)
22		青銅鉢	" 6.4×17.6	9 "	室 町	天山神社(鍛木町)	宝徳元年(1449)
		"	" "	2 "	"	"	天正16年(1588)
23		密教法具		一式 (49点)		修学院(東脊振村)	
○絵 画							
1	重 文	絹本着色 楊柳観音像	419.5×254.2	1 幅	高 麗	鏡神社(唐津市)	明徳2年(1391)寄進
2		" "	114.3×63.7	1 "	李 朝	広福護国禪寺 (武雄市)	
3		" 阿弥陀八大菩薩像	153.5×86.5	1 "	高 麗	" (")	
4	重 文	" 仏涅槃図	285.0×237.5	1 "	李 朝	最教寺(長崎県)	
5		" 善哉童子歴参図	105.8×59.0	1 "	"	広福護国禪寺 (武雄市)	
6		" 釈迦三尊及び比丘像	168.8×57.3	1 "	"	" (")	
7	県重文	" 八字文殊菩薩騎獅像	91.3×36.5	1 "	南北朝	誕生院(鹿島市)	
8	"	" 普賢延命菩薩騎獅像	123.0×79.0	1 "	室 町	実相院(大和町)	
9		" 十六羅漢図	115.6×51.2	2 "	"	広福護国禪寺 (武雄市)	
10		" 十王絵図	84.0×35.5	2 "	"	万寿寺(大和町)	
11		" 山越阿弥陀像	114.5×101.0	1 "	"	大覚寺(佐賀市)	
12		紙本着色 十六羅漢図	115.0×49.6	2 "	江 戸	竜泉寺(鎮西町)	
13		鬼子母神像摺本及び版本	35.5×15.0	1 "	"	本行寺(佐賀市)	寛政4年(1792)
14		板絵梵字曼荼羅図	27.0×25.0	1 面	南北朝	石塔院(三田川町)	
15		(参考)法隆寺金堂六号壁画阿弥陀三尊 図模写					明治三十年 大塚榛山写
		紙本着色 (1)阿弥陀如来像	178.0×115.0	1 幅		佐賀県立博物館	
		(2)観音菩薩像	195.0×74.0	1 "		"	
		(3)勢至菩薩像	"	1 "		"	
16	県重文	紙本着色 東妙寺古図	89.5×139.0	1 "	室 町	東妙寺(三田川町)	
17		絹本着色 福満寺伽藍配置絵図	149.0×48.0	1 "	"	福満寺(佐賀市)	
18		" 金立神社縁起図	181.0×107.0	1 "	江 戸	金立神社(佐賀市)	
○写 経							
1	県重文	紙本墨書 大般若経 断簡	25.3×51.5	2 卷	平 安	正法寺(佐賀市)	東大寺正藏院本
2		紺紙金字 妙法蓮華経	31.9×10.9	6 "	高 麗		至元6年(1346)
3		紺紙銀字 "	31.8×10.8	8 "	"		"
4	重 文	紙本墨書 梵網経 懷良親王筆	120.0×107.0	1 "	南北朝	東妙寺(三田川町)	天授4年(1378)
5		" 大般若経	23.7×9.0	10 "	"	玉林寺(大和町)	正平25年(1372)
○木 彫							
1	重 文	木造 多聞天立像	高 146.0	1 軀	平 安	大興善寺(基山町)	
2	"	" 薬師如来座像	" 89.1	1 "	"	東光寺(玄海町)	
3	"	" 聖観音立像	" 107.0	1 "	"	東妙寺(三田川町)	
4	"	" 不動明王及二童子像					
		(1)不動明王	高 88.2	1 "	"	永寿寺(娘野町)	
		(2)製吒迦童子	" 105.9	1 "	"	" (")	
		(3)杵羯羅童子	" 104.2	1 "	"	" (")	
5	重 文	木造 帝釈天立像	" 117.0	1 "	"	常福寺(牛津町)	
6	"	" 菩薩立像	" 148.0	1 "	"	殿原寺(浜玉町)	

番号	指 定	品 名	規 格	数量	時 代	出 品 者	備 考 (銘)
7		木造 如来形立像	高 108.0	1 軀	平 安	華嚴寺(伊万里市)	
8		" 天部形立像	" 100.5	1 "	"	三学寺(久保田町)	
9		" 薬師如来立像	" 137.5	1 "	"	医王寺(相知町)	
10	重 文	" 釈迦如来坐像	" 111.0	1 "	鎌 倉	東妙寺(三田川町)	
11	"	" 普賢延命菩薩騎象像	" 71.1	1 "	"	竜田寺(佐賀市)	正中3年(1326) 康俊作
12	"	" 四天王立像					
		(1)持国天	高 138.8	1 "	"	広福護国禪寺 (武雄市)	
		(2)増長天	" 138.3	1 "	"	"	
		(3)広目天	" 134.5	1 "	"	"	
		(4)多聞天	" 136.5	1 "	"	"	
13	県重文	木造 薬師如来坐像	" 102.0	1 "	"	薬師堂(神埼町)	
14	"	" 阿弥陀如来坐像	" 36.0	1 "	"	三学寺(久保田町)	文保2年(1318)
15	"	" 薬師如来坐像	" 53.5	1 "	室 町	法幢寺(唐津市)	文禄4年(1595)
16	県重文	" 菩薩立像					
		(1)日光菩薩立像	高 105.0	1 "	"	薬師堂(神埼町)	
		(2)月光菩薩立像	" 105.0	1 "	"	"	
17	"	" 菩薩立像					
		(1)日光菩薩	高 53.0	1 "	"	歓喜寺(北方町)	
		(2)月光菩薩	" 53.0	1 "	"	"	
18		木造 毘沙門天立像	" 110.0	1 "	"	本行寺(佐賀市)	
19	"	" "	" 74.0	1 "	"	修学院(東脊振村)	天正17年(1589)
20	県重文	銅造 薬師如来立像	" 55.0	1 "	平 安	歓喜寺(北方町)	承安2年(1172)
21	長崎県 重 文	" 如来坐像	" 78.0	1 "	高 麗	釈迦堂(長崎県)	
22	"	" 如来形坐像	" 34.5	1 "	李 朝	浄泰寺(唐津市)	
(付)		木彫 大黒天立像	" 41.5	1 "	江 戸	内山寺(伊万里市)	
		" "	" 61.0	1 "	"		
○石 彫							
1		石造 線彫地藏菩薩像	高 66.0	1 "	室 町	崎井勝(塩田町)	応永29年(1422)
2		" 線刻六地藏塔	" 143.0	1 "	"	永福寺(牛津町)	
3		" 線刻六仏六地藏塔	"	1 "	"	鍋島報効会	天文4年(1535)
4		" 四天王像	" 18.0	1 "	"	妙覺寺(多古市)	
5		" 普賢菩薩騎象像	" 80.0	1 "	江 戸	玉林寺(大和町)	
6		" 文殊菩薩騎象像	" 69.0	1 "	"	永福寺(牛津町)	
7		" 観音思惟坐像	" 38.0	1 "	"	"	
8		" 観音菩薩坐像	" 71.0	1 "	"	妙雲寺(三田川町)	
9		" 馬頭観世音菩薩坐像	" 65.0	1 "	"	江副カツ(大和町)	
10		" 大黒天立像	" 61.0	1 "	"	笠原実(牛津町)	
11		" えびす坐像	" 63.0	1 "	"	西ノ宮社(佐賀市)	
12		" 役行者坐像	" 94.0	1 "	"	塩田町鳥越部落	
13		" 弘法大師立像	" 77.0	1 "	"	岩松軒(佐賀市)	
14		" 閑庵王坐像	" 73.0	1 "	"	福満寺(佐賀市)	
15		" 十六羅漢像	"	9 "	"	岩松軒(佐賀市)	
16		" 地藏菩薩立像	" 65.0	6 "	"	福満寺(佐賀市)	
17		" 庚申塔	" 123.0	1 "	"	城雲寺(佐賀市)	
18		" 二十三夜塔	" 178.0	1 "	"	妙見社(佐賀市)	
19		" 弁財天石殿	"	1 "	"	西限部落(佐賀市)	
20		" 線浮彫地藏尊菩薩像	" 49.0	1 "	"	千葉大師堂 (北茂安町)	
21		" 地藏尊像	"	1 "	"	清浄院(小城町)	
22		" 観音思惟坐像	"	1 "	"	高城寺(大和町)	
23		" 多聞天立像	" 125.0	1 "	"	玉林寺(大和町)	
24		" 増長天立像	" 125.0	1 "	"	"	

〔総計 290点のうち国指定重要文化財23点、県指定重要文化財20点〕

講演会 (50, 10, 25 於佐賀県立博物館中展示室)

九州大学文学部助教授

「大陸文化と肥前の仏教文化の交流について」(要旨) 平田 寛

ふつう仏教美術を、仏教の教理をわかりやすく伝えるための方便のひとつとして考え、美術を信仰のしるべのようにみなす傾向がありますが、そのように限定することは、仏教美術を理解してわがものとするのには妨げがあります。仏教のただしい会得のための五学科、つまり五明のひとつには、じつは工匠明というのがあって、ものをつくるのがすなわち仏にいたる方法であるという、美術を積極的にたかく評価する思想があったのです。歴史的にわが国でみても、7世紀に仏教が公伝して、それとともにわが国の美術が飛躍的にたかい水準になったことができたのも、由なきことではありません。その意味で、このたびの仏教美術展もまた、仏教教理とは切りはなして観ることが、むしろ今日のわたくしたちには、自然で理にかなう入りかたでないかと存じます。仏教と結びつけるのなら、このようなかたちをつくることで、わが国の人たちは仏を観たのか、というようなことでよろしいかと存じます。

主題といきさかはなれますが、この展覧会でわたくしがつい印象をうけましたのは、第1室の埴塚遺品です。ことに滑石製の筒や容器はすばらしいとおもいます。肥前の材料をもちいて、他の地方にはみられぬ独自の美しさをつくっています。強健と申しあげますが、その独自の強健こそ、地方様式という概念でわたくしたちが理解しようと考えている、地方に生きたひとびとの形成した美意識であると言えます。

ところで、主題の大陸美術の受容という問題でありますが、言葉の広い意味では、この博物館にこれだけ多くの仏教美術の佳品が展示されていることが、受容のもっともよい證ということになりますが、それでは話になりませんので、すこし細かく問題をたててみる必要があります。

受容の問題は、8・9世紀の以前と以後とでは、様相がことなり、したがって問題の意味もちがってまいります。以前と申しますのは、中国では六朝から隋・唐の時代まで、朝鮮では三国から統一新羅朝まで、わが国では飛鳥、白鳳から平安時代初期までということになりますが、その頃においては、圧倒的に中国の影響が強いわけでありまして、朝鮮や日本はそれぞれ統一国家ではありませんが、仏教美術の面では、中国の仏教美術の直輸入という性格が強い。朝鮮やわが国の仏教美術は、それぞれに固有なものをしっかりとつくりあげる段階になくて、中国の仏教美術に包摂されると申上げてよいかと存じます。

ところが、以後の時代になりますと、朝鮮では高麗王朝が出現して、ひじょうに高い水準の仏教文化を形成いたしますし、わが国でもいわゆる国風文化が、この平安・

藤原時代に形成されますことは、みなさまご承知のとおりであります。以前の時代と比較いたしますと、朝鮮も日本も中国に対しまして、相対的に独自の文化をもち、仏教美術にもそれぞれに個性的な特徴をもつにいたるわけがあります。わが国の場合で申しますと、檜をつかった寄木造の仏教がつくられ、定朝様の普及がみられますし、濃艶華麗ないわゆるやまと絵が制作されます。高麗については、この展覧会の圧巻ともいえるべき鏡神社の楊柳観音像をはじめ、いくつもの高麗仏画の優品がその証候でありまして、中国にも日本にもない、すばらしい独自の境地をつくりあげているのであります。

わたくしとしては、こうした高麗美術について、従来あまりにも等閑視しすぎていたことを痛感いたします。わが国の藤原時代から鎌倉時代において記録にいう『唐本』の概念は、もっと検討する必要がある、具体的には高麗美術の受容ということを考える必要があると考えます。そのことを示唆する作品が、この展覧会に展示されているわけでありまして。広福護国禪寺の善財童子歴参図や、当館保管の紺紙金字法華経などは、その一例でありましょう。

(以下スライド解説)



重文 楊柳観音像

「肥前の石仏について」(要旨)

佐賀県文化財調査監 木下之治

佐賀県下の石仏の最古のものは、平安時代(仁安3年)に作られた北方町勇猛寺クリカラ不動の1基だけで、以後、石仏の出現は南北朝・室町時代を待たなければならない。

室町時代の石仏は1・2の例外はあるにしても地蔵尊だけが造立されており、地蔵信仰の隆盛を物語っている。今日800基以上を数えると思われる地蔵尊はこうした背景に立った文化的所産である。

しかし、地蔵尊が独立して信仰されるようになった背景には、極楽浄土に往生した時に如遇する未来仏から現世仏化されてきたためだと考えられる。塔に刻まれた願文には「現世安穩」のことが記されていて、庶民は心の支えとして一心に歸依し信仰してきたものと考えられる。江戸時代になると前代にもまして文化の交流は盛んになり、仏教も多様化して仏像も各種つくられるようになった。

その一つに観音信仰が挙げられるが、地蔵とともに石仏の主眼を両者で二分するようになる。両者のちがいは、地蔵尊は殆どが石彫ばかりであるが、観音は木彫と石彫の両者があり、木造観音が多く、信者を得、篤く信仰され世に聞かえていたようである。

大黒天が日本に伝えられると、我が国の神大黒命と習合し、両者の姿・性格が合体して恵比須天とともに七福神の一つとなった。

佐賀での大黒天信仰は農村で根強く、おすみの繁殖の豊かさにあやかって「子」の日に祭りが催され、大黒天は五穀豊饒を祈願する本尊である。

恵比須天は宿場か、家が立ち並ぶ場所に祀られている商売繁昌の神である。この像の県下最古のものは北川副町西ノ宮社にある元禄年間のものである。「西ノ宮」あるいは「西ノ宮社」と刻銘した石祠が見られるが、これは恵比須天のことである。

役行者は修験道の開祖といわれている。

江戸時代、修験道の拠点小川の牛の尾で、聖ヶ岳・鬼ヶ鼻・杵島山・塩田の八天神社を経て鹿島の御岳神社から多良岳の山頂へ達する西廻りや、牛の尾から基山へ向けての東廻りもあり、この間の道場には「役ノ行者」が祀られて修験道ははなやかであった。

羅漢像には五百羅漢と十六羅漢とがある。羅漢は修業の身でその姿を表現したものであるが、この時代にはその制作もかなり盛んであった。羅漢像は禪宗寺院に多く安置されている。これは禅の自力的な修業が羅漢の修業と相通ずるためではないかと推測している。

我が国の庚申信仰は平安時代に貴族の間で始められたようであるが、これは中国の道教の思想によるものである。即ち、我々の体の中には「三尸の虫」がいて、庚申

の夜半睡眠中に休より抜け出し、前回の庚申の日から今回の庚申の日に来るまでの60日間の罪状を天帝に報告するのだという、その罪状によって命がだんだん縮められ、これが昂じてついに死にいたるとした。そこで、庚申の夜は寝ずに過ごしたというのである。

佐賀地方に庚申信仰が伝えられた時期については河上宮古文書に「庚申講」の文字がみえており、川上地方では一部の人ではあったにしても鎌倉時代からおこなわれていたことが知られる。庚申講中によって建てられた庚申塔は室町時代末期のものが最古であるが、この頃より庶民の間にこの信仰が広まったと思われる。この過程で仏教では「庚申」とは「青面金剛」であると唱え、神道では「猿田彦命」としてと称している。

今日、碑文を見ると「青面金剛」「庚申」「庚申尊」「庚申神」「青面金剛庚申」「猿田彦庚申」「猿田彦」などと書かれている。

一方、塔を作り像を刻む庚申塔をみると、その像は青面金剛である。鬼を踏み、二臂、四臂、六臂の場合があるが六臂が多いようである。東西松浦、伊万里地方の庚申像は青面金剛に三猿を配しており、ほかに鶏と猿を刻んだものもある。

「二十三夜」信仰は私たちの先祖が月齢により生活してきた名残である。「二十三夜」「十九夜」「十六夜」など月の満加減によって「月」を祭る月待ちの行事であり、室町時代からおこなわれたと思われるが確かでない。この本尊を仏教では勢至菩薩だといひ「勢至菩薩」「大勢至菩薩」と碑に刻み建立しているが、神道では二十三夜神を「月読命」と称している。

今日では二十三夜信仰は「三夜待」といって職域や年令別・地域グループで盛大におこなわれている。

ほかに馬頭観音像が彫られ、太子講仲間による聖徳太子石殿や、西国八十八ヶ所巡りの霊場には多くの仏像が奉祀され広く庶民に信仰された。

ところで、江戸時代には佐賀県下の石工集団に砥川石工・塩田石工・値賀川内石工など知られているが、石工の実数やその歴史は判然としなない。しかし、当時の文獻にも「生き仏を石で作る」と感嘆し石工の技を高く評価している。

(なお刻像技法の変遷については博物館報第8号記載「佐賀県の石文化」にあるので省いた。文責当館)

講演会(50, 11, 8 於佐賀県立博物館中展示室)

「肥前の高僧をめぐる」(要旨)

多久市南部小 北 島 治 慶



小城町晴気円光寺出身の開室三光元信は慶長の初期「東照宮御由緒略書」や「三岳寺文書」並びに『鹿苑日録』にみられる通り易や深い学識により徳川家康から絶大な信頼を受けた。慶長5年(1600)時に関ヶ原の合戦が起ると家康は特に元信を「帷幕」に参加させた。この合戦が勝利の終ると「円光寺由緒略書」に明らかにするに伏見に円光寺を贈り、更に相国寺に塔頭円光寺を贈って元信の功に報いた。慶長3年豊臣秀吉の死に伴い翌4年家康は元信に『孔子家語』の出版を命じ、以来慶長11年まで「貞観政要」を始め、『6篇』、『3略』、『東鑑』、『武経七書』等7種類80冊以上の出版をなし徳川幕政下で、文教政策の基礎を築く。翌12年再び家康の命で禁中へ銅活字の献上をなし皇室と幕府との間の円滑化を計った。元信のかかる皇室への接近は『慶長日件録』にも窺われる。これが起因で当時南禅寺の悲願であった旧御殿下の1部が南禅寺の方丈として下賜されるに至ることは「三岳寺文書」や「円光寺文書」に見受けられる。一方慶長12年承応の死に伴い元信が外交文書の取り扱い責任者となり呂守大守等への返書の作成や朱印状の交付等にあたった。その活躍は『本光国瑞日記』に詳細に記している。

反面、慶長の初期元信は鍋島直茂親子を家康に紹介し直茂は転居まで家康に言上する程の信頼を得たが関ヶ原の合戦で豊臣方に加担し、佐賀藩は苦境に落ちた。しかし元信のとりなしで家康の誤解も解けその功で元信は慶長5年鍋島勝茂より小城町三里に三岳寺を贈られた。慶長10年勝茂は家康の養女茶々姫を正妻に迎えるがこの年元信は伏見の円光寺で祝宴を開き勝茂の結婚を祝す。更にこの年元信は佐賀藩内でドミニコ会によるキリスト教の布教に承認を与えたが慶長17年岡本大八事件の発生により再び佐賀藩は危機を招き多久安順を元信のもとに派し打開策を計った。この年元信は他界の身となる。

元信は三岳寺を贈られたが当時元信は家康の側近として多忙なため二世に大和町出身の瑞岩慶順を迎えた。

『三岳寺寺歴並ニ宝物調』によれば瑞岩はかつて元信が学資に窮したおり托鉢してまで学資を供した元信にとっては恩人である。瑞岩は南禅寺並びに鎌倉の建長寺で長老の任にもつく高僧で勝茂の長子鍋島元茂が瑞岩に帰依する。この瑞岩に三岳寺で学んだものこそ同じ小城町三里出身の潮音道海である。潮音は後に隠元にまみえ木庵に従いやがて黄葉宗縁樹派の派祖となり黄葉史上では最大の貢献者となった。かかる潮音もかつては大成経事件のおり『大成経破文答釈』を著しては幕府の処断に抗議し、或いは当時、林羅山を始め儒教界からの激しい仏教批判に『扶桑護仏神論』を著して仏法の尊厳を力説し徳川綱吉の違約には綱吉が潮音のため贈った館林の広濟寺を自らの手で焼く等文字通り護仏の鬼と化す。一方潮音は当時墮落した仏教界の救いを加茂宮に祈り他面外からの仏教批判に抗し得ぬ仏教界の無力さを『指月夜話』で歎く。かかる潮音も伝海には最も意を注ぎ『十善惡歌並ニ序』や『霧海南鉢』等を著す。ために鍋島光茂の娘仙姫は深く潮音に帰依しやがて縁樹院潮音舎の開基となった。

この潮音に桂昌院を始め佐賀では3代藩主鍋島綱茂や小城の2代藩主鍋島直能並びにその子鍋島元武が帰依する。特に元武は生涯潮音に帰依し後に金粟大和尚の称号を受ける。「築林集」に特筆されている梅嶺も潮音の法弟でしかも小城町出身である。

三岳寺は臨済宗南禅寺派ながら木庵、即非の扁額、聯額が掛けられ光茂高僧による法塔もあるが以上の点を考える時、ここ小城町が日本近世仏教史上で占める位置を無言の裡に語りかけるものがある。なお今日宇治市にある潮音舎では村瀬玄妙師により潮音の法燈が380年来護りつづけていることを付言しておく。



開室元信遺稿

博物館日誌

11月15日 三瀬村で移動博物館開催 (11月17日まで)	12月5日 第16回佐賀県学童美術展開場 (大展示室)
11月22日 第25回佐賀県美術展開場 (11月30日まで)	12月7日 「佐賀県の歴史と文化展」開場 (1、2、3号展示室 3月31日まで)
11月28日 鳥栖市で移動博物館開催 (11月30日まで)	

●行事のお知らせ

修学旅行等の計画に博物館の見学を折込んで下さい。

	常 設		展
佐賀県の歴史と文化展	50年 51年 12月7日～3月31日	大 人 50 (30) 大・高生 30 (20) 中・小生 20 (10)	佐賀県の地質時代から現代までの自然史資料や考古、歴史美術工芸の資料を系統的に展示し、本県の歴史と文化の特質について一般の理解に資する。

企 画 展		展	
展 覧 会 展	会 期	観 覧 料 ()内は団体料金	備 考
佐賀県高等学校書道展	51年 1月22日～1月25日	無 料	県内高等学校生徒の書道作品を展示し、一般県民および生徒、児童に公開することによって、高等学校生徒の書道文化と技術の向上に資することを目的とし、併せて各高等学校書道部員相互の研鑽の場にする。
佐賀県書道教育連盟 書初展	2月5日～2月8日	無 料	県内小、中、高校生及び一般人の毛筆書写について関心をもたせ、たゆまぬ努力によって作品効果が表現出来ることを理解させるための展示であって、ひいては本県の書道教育の向上と佐賀県書道の振興発展に寄与することを目的とする。
筒井茂雄退官記念展	2月14日～2月18日	無 料	佐賀大学筒井茂雄教授が3月退官されるのを記念し、教授の長年にわたる美術教育の研究の成果とS46年東光会展出品作「緑野風景」80Fなど油絵30点、それにデザイン科卒業生作品など総計60点を展示する。又会期中の最終日には、スライドをととしての記念鑑賞会も予定している。
佐賀大学卒業制作展	2月22日～2月28日	無 料	佐賀大学美術科は特設美術科教員養成課程、中学美術教員養成課程、小学校教員養成課程国選修の各コースから成りたち、特別教員は九州・山口一円に亘り高校美術・工芸の教員としての多くの人材を送り出しております。毎年この期に当り、在学中の研究の集約として各人努力作を集め展覧し、作品批評を頂くとともに本県民の方々の鑑賞を希求する。
三 根 霞 郷 展	3月6日～4月7日	大 人 150 (120) 大・高生 100 (60) 中・小生 50 (30)	孤高の画家三根霞郷は、これまで殆ど顧みられることがなかった。しかし、その遺作は、油彩、水墨を問わず、彼の優れた画業を見せている。今回、彼の遺作、遺品を一堂に展覧し一般の鑑賞に供するとともに、近代美術史上の彼の立場を明らかにしようとするものである。

●新刊書案内 「肥前の仏教美術」 1,300円

「肥前の仏教美術」の図録として刊行。全 200頁うちモノクロ、カラー写真90頁。

肥前の仏教美術を全領域から追求したもので、考古、工芸、絵画写経、彫刻、石造物、高僧の6部門から、出品物 140点について解説を付している。なお資料欄には「北肥前高僧小伝」(川副博)「肥前の石工名録」(中村勲)「肥前の仏教美術略年表」があり、仏教美術を究める座右の書である。

博物館報	第 28 号
発行年月日	昭和 51 年 1 月 1 日
編 集	大 國 弘
発 行	佐賀市城内1丁目15-23 佐 賀 県 立 博 物 館
印 刷	合資会社 佐賀印刷社